



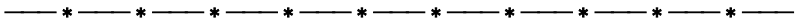
Data

監督: ロルカン・フィネガン
 脚本: ギャレット・シャンリー
 出演: イモージェン・プーツ/ジェシー・アイゼンバーグ/ジョナサン・アリス/ダニエル・ライアン/セナン・ジェニグス/エアンナ・ハードウィック

👁️👁️ みどころ

悪徳不動産屋やワケあり物件をテーマにした“不動産モノ映画”は多いが、“托卵”を絡めたラビリンス・ストーリー仕掛けの“不動産モノ”は珍しい。1960年代から70年代に開発された千里も泉北も大規模ニュータウンは広く快適だから、そこへの入居は新婚夫婦の夢だった。しかし、理想の住宅地・“YONDER”の9号棟は？まさか、脱出不能のそんな住宅でバケモノのような男の子の“托卵”を託されるとは！？

こりゃ、まさに“極限のラビリンス・スリラー！”まさに“世界騒然！精神崩壊！”映画は仕掛け！そしてアイデア！だと実感！



■□■このタイトルはナニ？なぜ托卵の映像がアップで？■□■

『カッコウの巢の上で』（75年）はアメリカン・ニューシネマの代表作だが、本作冒頭ではカッコウの特性である“托卵”（たくらん）のアップ映像が登場する。托卵とは、「卵の世話を他の個体に託する動物の習性」のことだが、その生々しい姿はあまり気持ちのいいものではない。他方、「ビバリウム」と聞いて、すぐに「ビバリウムハウス」を連想し、それが爬虫類や両生類を飼育するための容器のことだとわかる人の英語力は、相当なもの。私には全然わからなかったのだから・・・。

しかして、『ビバリウム』と題された本作は一体何の映画？導入部では、ちょっとしたストーリーの中で、本作の主人公トム（ジェシー・アイゼンバーグ）とその恋人・ジェマ（イモージェン・プーツ）のキャラクター紹介がされた後、2人が新居を探すためにある不動産屋を訪れるところからストーリーが始まることに。

■□■この不動産屋はヘン！？この分譲地もヘン！？■□■

不動産をテーマにした映画は多種多様だが、本作でトムとジェマに理想の住宅地“YONDER”を案内する不動産屋・マーティン（ジョナサン・アリス）はどこかヘン。そんな

な悪徳不動産屋(?)の案内について行かなければよかったのだが、若い2人はついつい言われるままに、マーティンの車の後を追って“YONDER”に入り、9号棟の案内を受けることに。

日本でも、高度経済成長時代に郊外で開発・分譲されたニュータウンでは、右も左も同じような建物が並んでいたが、ここ“YONDER”は・・・?

■□■まさに、こりゃ極限のラビリンス・スリラー! ■□■

本作のチラシには、「世界騒然!」「精神崩壊!」「《極限》のラビリンス・スリラー」の見出しが躍っている。「ピバリウム」がわからない人には「ラビリンス」もわからないかもしれないが、それは「迷宮」のこと。しかして、ラビリンス・スリラーとは?そして、本作はなぜそう呼ばれているの?

本作のラビリンス・ストーリーは、“YONDER”内の一区画である9号棟の入り、その“特徴”を説明していたマーティンが突如消え去り“YONDER”からの脱出ができなくなった上、段ボールに入った男の子を、「この子を育てれば開放する」と書かれたメッセージと共に受け取ったところからスタートしていくことになるが、こりゃ一体ナニ?こんなストーリー、今まで見たことない!まさに、こりゃラビリンス・スリラーだ!

■□■若夫婦が“YONDER”内で置かれた“宿命”とは? ■□■

私が大阪大学に入学した1970年当時の大阪は大規模開発の流れにあったから、千里で開発されたニュータウンの大きさにはビックリさせられた。しかし、そこに見る何十棟もの5~6階建ての集合団地は、敗戦で焼け野原になった日本とは全く異質の風景だったから、勤勉な日本国民がそんな姿に自らを奮い立たせ、ますますマイホーム獲得の夢に邁進していったのは当然だ。そして、1970年の大阪万博を終えて、日本が本格的な高度経済成長期に入ると、泉北ニュータウンをはじめとする大規模ニュータウンの開発は更に進んでいった。

しかし、中国でもアメリカでもそんなニュータウンの開発は日本の10倍。それはそれで驚くべき規模だが、本作のスクリーン上に登場する“YONDER”の規模はその数百倍、数千倍のようで、トムとジェマが“YONDER”から脱出しようとしてもできないほどの規模だから恐ろしい。もちろん、現実にそんなことはあり得ないから、本作はラビリンス・ストーリーなのだが、トムとジェマの若夫婦はあの悪徳不動産屋・マーティンのせいで、そんな“YONDER”の9号棟に入居させられたうえ、段ボールに入ったバケモノのような男の子の子育て(托卵)まで強要されることに……。さあ、2人はそんな宿命(?)を如何に受け止めるの?

■□■この奇妙な男の子の子育て(托卵?)は大変! ■□■

人間の寿命(80歳)は、犬の寿命(15歳)の5~6倍だ。しかして、本作の男の子は、98日後には7歳くらいまでに急速に成長したから、まるで犬並み。しかも、どこでどう言葉を覚えるのかわからないが、2人の言葉をそのまま真似たり、犬と同じ鳴き声で

鳴いたり、さらには、空腹になると耳障りな奇声を発し続けるから、扱いづらい。そのうえ、四六時中2人の行動を監視しているから、うとうとしことこの上ない。もちろん、そんな気持ちの悪い子供を育てるのはトムもジェマも嫌だが、“YONDER”から抜け出すためには仕方なし・・・？なるほど、冒頭の托卵のシークエンスはここに結び付けるためのもの・・・？子供から「ママ」と呼ばれるたびに「私はあなたのママじゃない」と言いながらも、ジェマは仕方なく面倒を見ていたが・・・。

他方、トムの方は、ある日タバコの火を庭に投げ捨てると、焼けた芝生の下の地面に何か異変が！ここを掘っていけば、脱出のヒントがありそうだ。そう思いついたトムは以降、それに没頭することに。しかし、こんなラビリンスな生活を2人はいつまで続けられるの？このままでは2人とも、まさに精神崩壊に！

■□■成長した青年に注目！展開する“地下の物語”とは？■□■

段ボールに入っていたあの赤ん坊が98日間で7歳くらいになったのなら、青年になるのは何日後？歴史上の主要な人物を主人公として描くNHK大河ドラマは、最初の2、3回だけ幼少期の主人公を登場させ、ある日突然青年期の主人公に変身させるパターンが多い。しかして、本作でも、犬のように鳴き、時々けたたましい叫び声をあげていた気持ちの悪いあのガキが、ある日突然トムよりも背の高い青年に成長した姿で登場するので、それに注目！この青年は意外にハンサム(?)だが、その行動を観ていると、やはりヘン！そのうえ、青年になってもまともな人間と同じようなしゃべり方はできないから、その恐さ、バケモノぶりは子供の時代以上・・・？

実を言うと、トムは一度この“化け物”を子供の頃に殺してしまおうと考えて、車の中に閉じ込めたのだが、ジェマの反対によってそれは挫折。そして、今や連日の穴掘り作業で肉体的にも精神的にも疲れ果ててしまったトムは、今更この若い大男に対抗する術もなし。事態は既にそこまで悪化してしまっているわけだ。そんな中、本作はラストに向けてあっと驚く展開に！

ボン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』(19年)、『シネマ46』14頁)では、韓国特有の「半地下住居」で暮らす貧乏一家の姿が印象的だったが、後半からはあっと驚く“地下”の物語が展開していった。それに対抗するかのようには、本作でも、後半からは地下迷路での本格的なラビリンス・スリラーが展開していくので、それに注目！もちろん“ネタバレ厳禁”だから、その内容と恐さをここに書くことはできない。したがって、そんな本作のクライマックスは、あなた自身の目でしっかりと！

2021(令和3)年3月17日記